
英雄伝説 零の軌跡 ～啼かぬ鴉はどこへ行く～

泣き虫カラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説 零の軌跡 ～啼かぬ鴉はどこへ行く～

【Nコード】

N5055Y

【作者名】

泣き虫カラス

【あらすじ】

大陸西部、クロスベル自治州―かつて帝国と共和国の狭間で熾烈な領土争いが繰り広げられたこの地は、現在では大陸有数の貿易・金融都市として発展を遂げ、繁栄を謳歌してた。一方、帝国と共和国による圧力も見えぬ形で高まっており、両大国の意向を受けた議員・役人たちが醜い政争と汚職を繰り広げる中、裏社会ではマフィアや外国の犯罪組織が台頭し、抗争を始めようとしていた。

警察に4人の若者が集められる中、一人の若者が魔都を訪れる。リ

ベールからやって来た彼の名はレイヴン・シャオ。漆色の髪と黒い瞳を待つ彼は、もう一つの名があった――鴉^{カラス}と。伝説の凶手の存在を追い続ける彼は、クロスベルの闇と光の運命に否応なく巻き込まれていくことになる――。

うる覚えです。間違えてしまうこともあるかもしれませんが。その時はご指摘お願いします。また、かなりの亀&不定期更新になると思っています。あらかじめご容赦下さい。

神狼たちの午後

ピンポン

『間もなく、クロスベルです。お荷物のお忘れが無いよう、ご注意ください』

「クロスベル、か。どんな所なんだろうな」

列車に揺られながら俺はクセになっている独り言を漏らした。こうしていると、前にいたリベールがひどく懐かしい。あそこではたくさんの人と出会えた。

俺の目的は果たせなかったけど、いい思い出になったと思う。さて、今から行く魔都にはどんな人が住んでいるんだろうか——俺は胸を弾ませながら目を閉じた。

クロスベル市。

活気ある商業区、金融・ビジネス街、カジノ・シヨウ劇場もある歓楽街、一般市民の住む住宅街、治安の悪い裏通り・旧市街など複数の市街に分かれている。2大国間の緊張に晒されながらも、常に人と物とミラが行き来するこの都市は、大陸中の人々の興味を惹きつけてやまない「ホットスポット」であり続けているそうだ。

一方でマフィアが存在や密貿易、違法なミラ・ロンドリングなど、負の暗黒面を常に覗かせているため「魔都クロスベル」なんて言わ

れている。最近ではエプスタイン財団の協力で「導力ネットワーク」？というのを試験導入されているらしい。難しい話はよく分らん。パス。

「まあ、こんなモンかな…」

俺は頭の中にあるクロスベルの知識を整理しながらホームを出る。一歩駅を出ると、そこは活気で満ち溢れていた。

すごいな…こんなに人が多いなんて。西日が街を照らし出しているがまだまだこれからが本番なんだろうな、と漠然と思った。

「まったく、けしからんなあ。あんな美人のお姉さんに抱き着かれるなんて。おいロイド、セシルさんが休みの日は俺に教えるよ？デートに誘うから」

「ねえ、ロイド。セシルさんとの思い出話とかない？ちょっと聞いてみたいわ」

「そうですね、私も興味があります。ロイドさん、話してください」

「おっいいねえ。話してくれよ、ロイド」

「はあ、みんないい加減にしてくれ…」

4人組の俺と同年代の男女が一人の青年に質問攻めをしていた。甘い感じの風貌にシャッキとした服装。どうやらロイドという名の彼は困った風に頭を掻いていた。

（女の人——セシル、という人の話題で盛り上がっているな。こ

の食いつきようからしてよっぽど美人なんだろう)

と、毒にも薬にもならないようなことをつらつらと考えながら鞆に仕舞った地図を探した。

えーと、地図地図…。地…図…。…ない。地図がない！？なんで？
どうして！？

俺がパニックで混乱する頭を必死に整理していると横から声をかけられた。

「どうしました？何かお困りですか？」

「ふえ？」

頭を鞆から上げるとさっきの青年だった。どうやら固まっている俺を不審に思っただけ声をかけたみたいだ。

(逃げたな)

(逃げたわね)

(逃げましたね)

…違う理由もあったようだが。

まあ渡りに船だ。クロスベルの住人みたいだし、頼らせてもらおう。

「ああ、ちょっと、地図を無くしたみたいで…。ホテル・ミレニア

ムってどこにありますか？」

「そこでしたら歓楽街ですよ。なんならお連れしましょうか？」

「いや、そこまでしてもらうわけには」

と、断ると彼は苦笑しながら手帳を見せた。

「はは、道案内も警察の仕事ですから」

俺はパチクリと瞬きした。

…警察？

神狼たちの午後（後書き）

ふと書いてみようと思って投稿しました。皆さんが楽しめるような作品にしたいと思います。

感想、評価ともいつでもお待ちしております。

神狼たちの午後

「成る程、特務支援課というんですか」

俺は歩きながらロイドさんに相槌を打った。

「ええ、最近立ち上がった部署で…。なかなか苦労してるんですけどね」

「ああ、そういえば自己紹介がまだでしたね。自分はレイヴン・シヤオと言います。よろしく」

「どうも、ロイド・バニングスです。こっちはエリイ」

と、ロイドさんは灰色がかった髪的女性を手で示した。

「初めまして、エリイ・マグダエルです」

「この子はティオ」

「どーも。ティオ・プラトーです」

素っ気なく返事をする女の子。…まさか、この子も警察官とか言わないよな…？

「最後にそっちの赤毛はランディ」

「おいおい、そんな紹介の仕方はないだろ、ロイド？」

赤毛の青年はロイドさんに絡みながら気さくに手を上げた。

「うつす。ランディ・オルランドだ。よろしくな」

と、それぞれ自己紹介を終えた。

「レイヴンさんは何故クロスベルに？」

「うーん、探し人。ですかね……」

俺はエリイさんの質問にあたりさわりのない返答をする。

「探し人？」

「ええ。ちょっと個人的な理由がありまして」

と、ロイドさんの疑問の声にそれ以上聞くな、と暗に含ませた言葉を返した。

どうやらすぐにこっちの意図に気付いてくれたようで、

「そうですか」

としか言わなかった。

「ここですんね」

どうやら話している間にホテルに着いたようだ。

「どうもありがとうございます」

「いえ、これも仕事ですから。何かあればクロスベル警察に。力になりますからね」

俺は笑ってロイドさんと握手してふと後ろポケットを探った。財布がないとホテルに泊まらないからな。

ポンポンと、ズボンを触って——カチン、と固まった。

あ、あれ？いやーな予感…。

妙にスースーするポケットを見ようと振り返って、俺は顔から血が引いていくのを感じた。俺の真つ青な顔に、ロイドさんは恐る恐る、といった具合に話しかけてきた。

「レ、レイヴンさん？どうかしましたか？」

「…。ポケット、が、破けてる…」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

ヒュー、と風が通り抜けていった気がした。

「すみません、自分の不注意のばかりに…」

「いや、何て言うか…」

「不幸、と言うしかないよなあ。これは」

「クロスベルに来てすぐこれとは、さい先が悪すぎますね」

「だ、大丈夫ですよ。レイヴンさん元気を出して下さい」

4者4様の言葉をもらってますます落ち込んだ。

「そうだ」

ふと、ロイドさんが手を打った。

「なんだったら、特務支援課ビルに来ませんか？」

「へ？」

「そりゃあいい。この時間帯だったら、宿はどこも満杯だろうし」

「そうね、私もそれが良いと思うわ」

「でも、私たちは明日マインツに行かなくてはいけないんですよ？」

それはどうすれば?。」

俺はマインツという言葉でバツと顔を上げた。

「マインツ?。」

「ええ、北西にある鉾山の町です。私たちは調査でそこにいかないといけないんですが…」

「それでしたら、いい考えが。明日、そのマインツまで着いて行ってその宿に泊まりますよ。ミラは、血洗いなりなんなりして何とかしましょう」

俺の提案に4人は少なからず驚いたようだった。

「でも…山道は険しいですよ?魔獣も出ますし」

ロイドさんの言葉に心配はいらないと首を振って、懐からあるものを取り出した。

「大丈夫。自分にはこれがありますから」

「それは…」

「第5世代戦術オーブメント——『エニグマ』ですよ」

神狼たちの午後

「レイヴンさん、何故あなたが『エニグマ』を？」

俺はティオちゃん（なんかちゃん付けの方がいいかな、と思った）の質問に苦笑しながら答えた。

「ああ、前までリベールに居てね…ツアイスで知り合った女の子に貰ったんだよ」

「何？女の子たあ聞き捨てならねえな。今度お兄さんに紹介してくれよ」

女の子というワードに食いついてきた。どうやらランディさんは見た目通りの人だったらしい。

「別に良いですけど…その子、13歳ですよ」

「え」

ランディさんのあまりにも情けない声にみんな声を出して笑った。

ああ、いい人たちだな、と思いながら話を進める。

「とまあ、そう言う訳ですから自分の身は自分で守れますよ」

どうやら俺の言葉にみんな納得してくれたみたいでそのまま特務支援課の分室ビルと言う場所でお世話になることになった。

課長だという人が投げやりにOKを出してくれたけど、こんなんでいいのか？と、少し疑問を持ちながら苦笑している4人に着いて行った。

『あら、おはよう』

夢を見ている。

『目が半分閉じているわよ。まったく、寝坊助さんね』

目の前にいる女性——微かに残った理性が大切な記憶だと告げているが、相手が誰か分からない。

『ほら、顔を洗って。今日は、大切な日でしょう？』

（大切な日…？）

夢の中の自分が返事をした。まるで、他人の日記を眺めているみたいで酷く実感がない。

目の前の顔の見えない彼女は、しょうがないわね、と言って俺に

抱き着いた。

『今日は大切な――』

「はっ――！」

息も荒く俺はベッドから飛び起きた。見覚えのない部屋――記憶を辿って、支援課のビルで一泊させてもらったんだと思う。

「今のは……」

胸の中がモヤモヤする――何か、大切なことを忘れているような……。

疲れているのかな、と取り敢えず見た夢を棚上げして太陽の光が差し込む窓を見た。

「……。取り敢えず、飯だな……」

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

「うっす」

「おはようございます、レイヴンさん」

「どうでした？昨日はよく眠れました？」

俺が一階に下りるとロイドさん以外の3人がすでに席に着いていた。

挨拶をして自分も勧められた席に腰を下ろす。

「ええ、お陰様で。疲れていたからかグッスリ眠れました」

「おいおい、俺たちあんまし歳変わらねえだろ？タメでいいぜ、タメで」

ちよつと躊躇したけど、3人とも当然、という顔をしていたからお言葉に甘えさせてもらうことにした。

「それじゃあ…。ロイド…はどこに行っただんだい？」

「ふふ、ロイドはキッチンよ。当番制でご飯を作ることになっているの」

俺のぎこちない言葉に少し笑いながらエリイが教えてくれた。

「へー…。みんな、仲がいいんだな」

「まあ、これでもまだ1か月も経ってないんだけどな」

俺はランディの言葉に少し意外だな、と驚いているとロイドがキツチンからいい臭いのする御飯を持ってきた。

「やあ、レイヴン。おはよう」

「おはよう、ロイド。…いい匂いだね」

「はは、ありがとう」

俺たちは食卓に着いて空の女神エイドスに祈りを捧げてからいい臭いのする朝ご飯に手を伸ばした。

「それじゃあ、レイヴンの為にもそろそろ出ようか」

「なんだか、悪いね」

恐縮しながら分室ビルを出て西通りを通りながらマインツ方面に歩く。

「そついや、レイヴンはどこ出身なんだ？リベールから来たって言うってたし、やっぱリベール出身？」

「いや、共和国だよ」

俺はランディの質問に答える。

「生まれは共和国なんだけどね。両親が早くに死んじゃったから、レミフェリアの親戚に引き取られたんだ。で、旅をしてリベールに居たってワケ」

「へえ、そうだったのね」

「レミフェリアと言えば、医療大国で有名ですね。確か、昨日行つた聖ウルスラ医科大学に出資しているんじゃないか」

「ああ、そうだね。あそこは空気の美味しい良い所だよ。…美人も多いしね」

「おおっ！いいねえ。レミフェリアは雪国だから色白美人が多いって聞くしな！」

「ランディ…」

「ランディさん…」

「まったくもう…」

3人は調子のいいランディにため息をついた。まだ特務支援課発足から1か月も経ってないって言うのに、やけにノリがいいな…。

と、俺たちがバス停前に差し掛かった時だった。

ピクン、とティオが何かを聞いたように動きを止める。

「みなさん、今狼の声が…！」

「えっ」

「…アクセス」

キューンと、魔方阵がティオの周囲を包む。

俺は3人の真剣な様子に戸惑いながらもティオの言葉を待った。

ティオが言うには、この先から狼の声が聞こえたらしい。

何でも、今ロイドたちは魔獣事件の調査をしているそうで、マイ
ンツは最後の調査地点のようだ。

「じゃあない、歩いていくか」

「です、ね」

「レイヴンさんは大丈夫？」

「ああ、平気だよ。旅をしている時は大抵は歩きだったからね――
お金がないから」

「あ、あはは…」

俺の言葉に苦笑しながらロイドは先に進んでいった。

それにしても、ティオはよくそんな遠くの所の声が聞こえたな、と今更のように不思議に思ったが聞かないことにした。

ま、何でもいいや。

神狼たちの午後（後書き）

レイヴンが起きた時にはもうソーニャ副指令は帰った後でした。

夢でも現実でも寝坊助さんなレイヴンでした。

11/15 訂正

神狼たちの午後

「せいっやあっ！」

「オラッ！」

「ティオちゃん、そっちに行っ たわ！」

「了解です……」

マインツ山道——そこで俺たちは魔獣と戦っていた。巨大な鷲型魔獣が空を転回しながらこちらを狙って急降下してくる。

「危ないです、レイヴンさん！」

と、今度は俺に向かって鋭利な爪を向けてきた。

冷静に見極めながら指でラインをなぞってエニグマを駆動させる。

「カラミティエッジ！！」

時の刃が風を切り裂き、魔獣の心臓部分に当たって悲鳴を上げながら消滅した。

「ふう、これで最後だな」

「いやゝ、しかしなかなかの腕前だな。アーツを精密かつ迅速に発動させるとは」

「…ビックリしました」

「そうね。レイヴンさん、何かやってたの？」

俺はみんなの賞賛の声に照れながらも答えた。

「ああ、うん。昔とった杵柄ってやつかな。道場に通ってたんだよ」
頭を掻きながら明後日の方向を見る。

はあ、こんなのはあんまり慣れてないんだけどな。

「それより、早く上りましょう。上に何かあるか確認するんだろ？」

「ああ、そうだった。みんな、行こうか」

ロイドの一声で一同は再び歩いて行った。

今は、バス停から分岐している方へと足を進めている。

さっきの魔獣は手配魔獣だったそうで、俺はその手伝いをした、
という訳だ。

「ここが頂上みたいだな…」

「そこそこかい屋敷だな。誰が住んでいるんだ？」

俺は屋敷を観察していると、柵の横に看板が出ているのに気付いた。

「《ローゼンベルグ工房》…？」

「ああ、ここが…」

俺が声に出して呟くとエリイが知っている風な反応をした。

なんでも、ここは有名なアンティークドールを作っている場所のようで、マニアからしたら垂涎モノの人形を作っているらしい。その作りはまるで生きてるように見えるとか…。

俺はエリイの説明に「へえ」と驚きの声が出た。

流石はクロスベル。こんな世捨て人が暮らすような辺境でも、とんでもない人が住んでいるとは。

「あら、お兄さんたちだあれ？」

と、後ろから女の子の声が聞こえた。驚いて後ろを振り返ると菫色の髪をした、ドレスの少女がいた。

「君は？」

「あら、レディの名前を聞くときはまず自分から名乗るものよ」

「はは、それは失礼を。俺はレイヴン」

「ロイドだよ」

と、それぞれ自己紹介をしていく。

人形工房の主のお孫さんかな？と思っていると今は家主はいないとのこと。

俺たちはここから立ち去ることにしてドレスの少女に別れを告げた。

「頑張つてね、支援課のお兄さんたちと《鴉》のお兄さん」

…！？

今、何て！？

「なあ、俺たちつて支援課のこと言っていないよな」

「あつ」

「クロスベルタイムズを読んで知ってたんじゃないのか？」

「それでは、《鴉》とはどういう意味なんでしょう」

「…俺の髪がカラスみたいに見えたからじゃないかな」

「ああ、成る程」

俺の言葉にみんな納得してくれたみたいだった。

（あの女の子…まさか俺の秘密に…？）

俺は疑念を胸に抱きながらもロイドたちに着いて行って再びマイ

ンツに向けてバス停まで戻っていった。

神狼たちの午後（後書き）

レン登場回です。

名前までは出ませんでしたでしたがちゃんとロイドたちは名前を聞いていますよw

神狼たちの午後

《ローゼンベルグ工房》を後にした俺たちはトンネルの前に来ていた。なんでも、このトンネルは70年前から存在して、採掘した七耀鉱の運搬に使用されていたそうだ。

エリイとティオの解説に耳を傾けながらトンネルの中に入る。

その時、トンネルの奥から響く狼の遠吠えが聞こえてきた。

「これは…!」

「例の狼の!」

「みんな、急ごう!」

俺たちはロイドの掛け声でトンネル内を走り抜けた。するとそこには、白い毛並みを持つ神々しい狼がいた。

警戒するロイドとランディ。しかし、ティオは二人を抑えて狼と会話を始めてしまった。

「え〜と…?これは、いったい?」

「さ、さあ」

「ウルル…ウォン」

「え…それって」

ティオが何かに驚いていると、狼はそのまま崖を上って姿を隠してしまった。

「あらら」

「ティオ、“彼”は何て言ってたんだ？確かに俺たちに何かを伝えたいみたいだったけど」

ティオは信じるかどうかはみなさん次第ですが、と前置きしてから、

「その、ニュアンスだけを伝えたと『最後の欠片はこの先に後はお前たち次第だ』だそうです」

と、眉を寄せながら言った。

「『最後の欠片』か…。なかなか意味深な言いようだね」

「ああ、そうだな。最後ってことは、何か重要なことが分かるのかもしれないな」

俺たちは頷いて急ぎ足でメインツへと向かったのだった。

「ここがマインツ…」

マインツは、崖をくり貫いて作ったような村だった。今でも良好な七耀石が採掘できるとあって、屈強な肉体をした鉱員たちが鉱山を出入りしている。

「それじゃあみんな、俺は働き口がないかまずはあの《赤レンガ亭》っていう所に行ってみるよ」

「了解。俺たちは町長に話を聞いてくるよ。また後で会おう」

俺たちは取り敢えず分かれて、俺は《赤レンガ亭》へと入った。った。

「すいませーん」

「はいはい、何だい？」

俺が声をかけると、カウンターから女の人が返事をした。この人が女将かな、と話しかける。

「実は、今職を探していました…ここで働かせて頂けませんか？」

「おや、どうしてだい？」

女将さんの疑問ももつともなので、俺は目的があってクロスベル

に来たこと、そして財布を無くしてしまったことを話した。

「あははは！そういうことかい。いいよ、雇ってあげる」

「本当ですか！？」

「ああ、本当さ。週末は鉱員どもが酒盛りをするんでね、そろそろ男手が欲しいと思っていたとこなのさ」

俺はとん拍子で話が進んでいくのにラッキー、と思いながら仕事の説明を聞く。

ある程度説明が終わると、もう日が暮れて夕方になっていた。

「ああ、もうこんな時間か。取り敢えず、エプロンをして準備をしておいてくれないかい？そろそろ仕事上がりの鉱員どもが酒を飲みに来るかもしれないからね」

「はい、分かりました」

俺はエプロンを着てビールが減っていないか確認したり、昼に出たゴミを捨てたりと仕事をこなしてゆく。

すると、カランと扉が開く音がして振り返るとそこには、ロイドたち四人が立っていた。

「ああ、レイヴン。仕事見つかったんだ」

「おう、お陰様でな。それでみんなは、今日は泊まるのか？」

「うん。部屋を用意してもらえるか？」

「了解。こつちだ」

俺は女将に一言告げてロイドたちを一番大きい部屋に通す。

「で、何か進展があつたのか？」

「ああ、ある程度真相が見えてきたと思うよ」

少し自信ありげなロイドの表情に安心しながら、俺は応援の言葉を告げて仕事に戻った。

——夜——

「うわああ！」

外から男の悲鳴が聞こえた。多分さっきまで飲んでいた鉱員たち

だろう。

「さて…ちょっと覗いてみるか」

俺は女将さんたちに気付かれないよう、裏口からこっそり外に出た。

神狼たちの午後（後書き）

次回、一章は終了です。

レイヴンはいったい何の目的があるんでしょうか…。

続けて二章も更新できたらいいな、と思います。できたら、ね…。

神狼たちの午後

「追っぞ！」

「おう！」

「了解です…！」

「任せて！」

俺は、ロイドたちに見つからないようにこっそり戦いを見ていた。

どうやら、町を襲っていた狼型魔獣の正体は飼いならされた魔獣だったようだ。

流石、と言うべきなのか。

コンビネーションはなかなかのもので魔獣相手に危なげなく立ち回っていた。

「…しかし、相手はプロ。甘く見ていると酷い火傷を負うのは確実。さて、どうするのか…」

俺はその時、俺と同じように見物している人物たちに気が付いた。

「あれは…。挨拶でもしとくか…色々迷惑をかけそうだし、片方は知らない相手でも無いしな」

俺は、その人物たちに会うために岩場から移動した。

「——分かった。君がこの街に手を出さないというなら、私も不干渉を約束しよう……それと、何時まで隠れているつもりだ？ それ以上姿を現さないと言うなら——斬る」

「——失礼。人見知りの物でね」

「あら」

俺は頬に傷のある男の声に返事をして、姿を晒した。

と言っても、仮面と装束、あと声を変えて正体がばれないようにしているが。

「かの有名な『風の剣聖』・アリオス・マクレイン殿とお見受けする」

「ああ、確かに私はそう呼ばれている——それで貴様は何者だ？」

「それでは失礼して——私の名は《鴉》^{カラス}、とでも読んで頂けたら」
傍にいた女の子は俺を見てクスクス笑う。

「それじゃあ、私も自己紹介しなきゃね。執行者??? 《殲滅天使》レンよ。よろしくね」

「こちらこそ。どうやら、彼らは事件を解決したようだ」

「まだまだ未熟だな」

「これは手厳しいですね。私は十分やったと思いますが」

俺はおどけた風に言いながら肩を竦める。

しかし、アリオスは俺の態度に誤魔化されてくれなかったみたいだ。

彼はこちらを睨みつけて言う。

「それで《鴉》よ。貴様は何の用でここに居る? クロスベルに何の用だ?」

「ふふ、そうですね——ここに居るのは興味が湧いたから、クロスベルに来たのは人探しのため——ですかね?」

「人探し?」

「ええ、大事な大事な、ね」

俺はそう言っただけ上がった。ここにはもう用はない。

そろそろ、本来の目的に戻ろう。

「それでは、また会うことがあれば――」

そう言っただけ俺は闇に溶けるように姿を消した。

「ふん――不気味な」

「あら、あなたもそう思う？」

アリオスはそう言っただけ剣の鍔から手を離れた。

「生きていたら必ずある気配が無かった――面と向かっているというのに、だ」

「ふふ、私は似たようなのと戦ったことがあるけれどね」

「ほう？それは興味深いな。どこでだ？」

レンはどこか懐かしそうに――クロスベルの方角を眺めながら口を開いた。

「不思議で楽しかった、箱庭で、ね――」

「それじゃあノエル。彼らをクロスベル市まで送ってあげて頂戴」

「イエス・マム！」

ロイドたちはやれやれ、やっと帰れる、と肩の荷が下りた気分できると、ティオが口を開いた。

「そういえばロイドさん。レイヴンさんに挨拶をしていけないのですか？」

「ああ、そういえば。すみません、ノエル曹長。ちょっと知り合いに一言声をかけてきます」

「ええ、どうぞ。私はここで待っていますから」

ロイドたちは《赤レンガ亭》に入って、女将さんに話しかける。

「すみません、レイヴンはいいますか？」

「え？だれだい、その人。ここにはそんな名前の従業員はいないよ」

「——え？」

「泊まらないなら帰った帰った」

俺はマインツを振り返りながら今頃戸惑っているであろう、この街で出来たばかりの友人たちに独り言を漏らした。

「悪いことをしたかな——ま、大目に見て貰おう。…がんばれよ、特務支援課の諸君」

俺はそう言つて懐から地図と財布を取り出して思案した。

「さて、当面は——」

「この『星見の塔』って所を拠点にするか」

神狼たちの午後（後書き）

これで一章は終了です。

彼は一体何者なのか？

ヒントはレンの言葉です。分かるかな？

金の太陽、銀の月（前書き）

第2章スタートです。

この章ではレイヴンの目的、そして彼の持つ力が明かされると思います。

勘の良い方なら、薄々気付いているかもしれませんが。

それでは——どうぞ！

金の太陽、銀の月

俺は共和国と言つても人里離れた、山奥に住んでいた。

両親は優しくかったが忙しい人たちだったらしく、あまり構つて貰つた記憶がない。

後に聞いたところによると、父は大物議員、母は不倫相手だったそうだ。詰まる所俺は隠し子と言うやつで、だからこそこんな人があまり来ない山奥に居を構えていたのだろう。

かといつて、まったく人が来ない、という訳でもなかった。

時々修行と言つて滝に打たれにやつて来る武術家の青年は、暇があるときは一緒に遊んでくれたし、初歩的な武術を教えてくれた。

それに、小さかった当時の俺にとって山は文字通り宝の山と言っても過言ではなく、それこそ朝早くから日が暮れるまで遊んでいた。

そんな時、俺は人生で初めてと言つていいほど我儘を言った時がある。

今から思えば、あんな些細なことで拗ねなかったら？あれ？は回避できたかもしれないというのに。

俺はあの日を、出会いと後悔の記憶で頭に今でも焼き付いている。

「なんだよ、父さんも母さんも。ちょっとぐらい我儘聞いてくれたってさ」

僕はぶつぶつと独り言を言いながら山の中を歩く。

「あーあ。今日はオジサンは来ないし、何して遊ぼうかな」

魚釣りは昨日もやったし、崖のぼりは大抵の所は登れるようになった。

オジサンから教えてもらっている武術も、相手がいないとつまらない。

ホント、何して遊ぼうか。

と、その時何かの物音が耳に入ってきた。

…何だろう？オジサンとの稽古の時に聞く、拳が空を切る音に似ている。

僕は興味が湧いてきてそっちの方に近づいて行った。

するとそこには——天女がいた。

紫色の髪を風でなびかせながら、手に持った剣を振るう。その姿はまるで舞のようで——一瞬で目を奪われてしまった。

「誰っ！」

「わわっ!？」

ば、ばれた!？

「あなたは誰ですか？ここは誰も来ようとはしない場所ですが」

キツと睨まれてしまつてパニック状態になっていた僕は、将来思い出して恥ずかしい思いをする発言をしてしまった。

「そ、その…君（の舞）がとっても奇麗だったから…つい」

答えになっていない返事だということに、パニックで頭がゴチャゴチャになっている僕に分かるはずもなく。

酷く場違いで空気の読めていない発言に回りの空気が凍った気がした。

お互い、無言。

何も言わない女の子に僕は不振に思つて声をかけようとした——瞬間。

「え、えええええええええええええええつ！！！！！！！」

と、顔を真っ赤にして物凄いスピードで木の後ろに隠れてしまった。

「えと……？」

僕、何か悪いこと言ったでしょうか。

「あの……すみません？」

「は、はいっ!？」

「勝手に見ていたことは謝ります。でも、木の後ろに隠れたままだつたらちゃんと謝れないから、出て来て貰えないかな？」

母さんからは謝るときはちゃんと相手の顔を見て謝りなさい、と躡けられたから僕はそれを実践しようとした。

ケンカ中でも、言われたことはちゃんとする。僕のポリシーだ。

「わ、分かりました……」

僕のセリフにうーうー唸っていたけど、ようやく決心が着いてくれたらしい。

「それじゃあ、改めて……ごめんなさい！」

「い、いえ。私も強く言いすぎたので……」

うん、どうやら許してもらえたみたいだ。

僕は一つ頷いて右手を差し出す。

「えっと…これは？」

「握手。あと、僕の名前はレイヴン・シャオ。よろしくね」

「あ…」

彼女は少し躊躇いながら僕と握手した。

「私の名前は、リーシャ。マオです。こちらこそ、よろしくお願いします」

これが、僕らの出会い。

そして、決定的に僕らの運命が歪んでしまった瞬間だった。

「ん…」

俺は欠伸をしながら起き上った。どうやら、気付かぬ間に眠ってしまったらしい。

なんとも、懐かしい夢を見た気がする。

「最近多いな…ホームシックか？」

自分に苦笑して凝り固まった体をほぐす。

「さて、それじゃあ調査を始めるとしますか」

俺はこの前着た装束と仮面を付けて塔から飛び降りる。

目指すは、湾岸区。

金の太陽、銀の月

クロスベル市・湾岸区。

エルム湖を望む広い公園は市民たちの憩いの場として親しまれている場所だ。また、湖の対岸にある高級保養地・ミシユラムへと向かう水上バスの発着場となっている。

その一角には、最近入ってきた会社が黒月貿易公司^{ヘイユエ}。しかし、その実態は共和国の犯罪組織、「黒月」の支社である。

俺は共和国出身だからその辺りのことは詳しい。数年前にはかの大陸西部最強の傭兵団の一つ、『赤い星座』と熾烈な抗争があった。現在ではここ、クロスベルにて現地のマフィア、『ルバーチエ商会』との抗争の真ただ中である。

しかし、俺にとっては正直言っただけのことだ。今回、ここに来たのには理由がある。

情報収集している中、気になる噂を聞いたのだ。

——「黒月」が、共和国の伝説の『凶手』を雇った——
ピンゴ。

俺がクロスベルに来たのは正解だったようだ。

リベールでは例の『異変』に関係しているのでは、と思ったが空

振り。

正直、半ば諦めていたほどだ。

俺は湾岸区に到着してすぐに「黒月」に侵入しようとしていたが、思わぬ客人が「黒月貿易公司」に入ってい行くのを見た。

「ろ、ロイドたち——？」

何でアイツらが？というか、この街の？裏側？に対して堂々と入り過ぎだろうが！！何考えてんだ！？

俺は少しの間どうするか頭を悩ませたが決心した。

——もう、どうにでもなれ。

ロイドたち四人は「黒月貿易公司」の支社長である、ツアオと対面していた。自分たち特務支援課のメンバーの名前を全て知っていた所や、《ルバーチエ商会》と敵対関係があることを暗に匂わせる口振りから、かなりの切れ者だと思われた。

ロイドたちはただ圧倒されるのみだったが、《銀》の話題になった時——？それは現れた。

「東方人街の裏側では、《銀》はただの伝説ではありません。かの伝説の凶手は、正規の手続きに則って高額報酬を払えば？仕事を請け負ってくれる、といいます」

「——ほう、その辺りの話、ぜひとも詳しく聞きたいところだな『白蘭竜』。私も同席願おうか？」

「——！！」

「なっ！？」

まるで、墨汁を垂らしたかのようにジワリと音もなく現れた。

俺は姿を偽っているからロイドたちにはばれないだろう。

「何者だ！」

ロイドとランディは得物を構えて俺の前に立ち塞がった。

「いやいや、私は怪しいものではない。ただの？一般人？だ」

「ふん、そう言う奴に限って悪人が多いんだよ」

「……怪しさプンプンです」

俺の発言にランディは吐き捨てるように返事を返す。

…ていうか、ティオもはつきり言うね…。傷つく、結構。

俺は内心ダメージを負いながらも不敵に笑って見せる。

「そうだね、お近づきの印に自己紹介でも——我が名は《八咫鳥^{やたがらす}》。そのまま《鴉》と呼ばれもするがね」

「《鴉》——？レイヴンと関係があるのか？」

「レイヴン？ああ、あれの知り合いか。まあ、無関係ではない、とだけは言っておこう。少々陰悪な、と付くがね」

俺はロイドの詰問に内心ヒヤリとするものを覚えながらもはつきりと答えた。

やはり、《殲滅天使》とのやり取りが拙かったらしい。俺は堂々と嘘をでっち上げながらもツアオに向き直った。

「それより君たち、ここの家主は彼だ。まずは彼の主張を優先した方がいいのでは？」

「そうですね——少々驚きましたが、いいでしょう。私もあなたに聞きたいことがありますしね」

ロイドたちはツアオの言葉に齒噛みしながらも席に座った。

騙している故に、ロイドたちの視線が突き刺さる。

——ストレス溜まるな、こりゃ。

俺はこっそり溜息をついた。

金の太陽、銀の月

「はあ…」

我ながら、何とも辛気臭い溜息が出た。左右からはロイドたちの視線、目の前からはツアオの鋭い眼光。四面楚歌、とは誰が言ったのだったか。

俺はやつとこさ終わった情報収集に少々ではない疲れを感じながら変装を解いた。場所は歓楽街近くの路地裏。頭の中でさつき得た情報を整理しながら歩く。

と、目の前に見知った集団がいた。俺は物陰にさつと姿を隠す。そこには、ロイドたちが紫の髪をした娘と話していた。

「その…何だか迷惑ばかりおかけしてしまったみたいで…」

「いやいや、そんなことはないよ」

娘の方がものすごく申し訳なさそうな顔でロイドたちに謝り倒している。ここから見ていて謝り合戦を繰り広げていそうな感じた。

その時、俺に不思議な感覚が奔った。何だ…？俺は、あの娘を知って、いるのか？

どこであつた？と、首を傾げる。

「ママー、あれ何ー？」

「しっ、見ちゃいけません」

そのままじっと見つめていると、どうやら話も終わってロイドたちが帰る様子に見えた。

「それじゃあ、リーシャ」

ロイドの何気ない一言。その一言が、電撃が体に走ったかのような衝撃が駆け抜けた。

「そつだ…あの時の…！」

俺は遙か昔に思えるような記憶の一場面が脳裏に広がった。そうだ、あの時会った、女の子だ…！

呆然としていると、後ろからドン、と人がぶつかる衝撃と共に俺は転んでしまった。帽子をかぶった少年がそのまま走り抜けていく。

俺は咄嗟の事に声も出すこともできずに道に転がっていると、頭上から心配そうな声がかけられた。

「あの…大丈夫ですか？」

「あ。ああ、ダイジョウブ、ダイジョウブ…」

片言になりながらパチクリ、と瞬きする俺に不思議に思ったんだろう。声をかけてきた人物は俺の顔を覗き込む。

（う、おおお…）

俺の目の前に、その、桃、いや。何だろうスイカ？それは言いすぎか——のような膨らみが見えた。

（つて、何考えてんだ、俺は！！？）

「あれ？もしかして——レイヴン、さんですか？」

その声にハツとしながら今度こそ声をかけてきた人物の顔を見る。

「リーシャ……？」

俺は、呆然としながら——目の前の人物の名を呼んだ。

金の太陽、銀の月（後書き）

ついに、会ってしまいました。

次回はイリアさんと絡ませたらなーと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5055y/>

英雄伝説 零の軌跡 ～啼かぬ鴉はどこへ行く～

2012年1月13日21時55分発行